

平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	28K20	氏名	内山 智枝子
研究主題 —副主題—	ルーブリックのアセスメント機能を活かすためには —中学校・高等学校理科における実態調査を通して—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	渡辺 貴裕
所属校	都立淵江高等学校	校長	大塚 雅一

キーワード： ルーブリック、学習評価、アセスメント、中学校・高等学校理科

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

現行の学習指導要領は、「思考力・判断力・表現力」の育成を重要視した構成であり、これらの力を育むためには学習評価の充実が不可欠である。しかし、高等学校における学習評価は、客観テストのような知識量のみを問う特定の活動に偏重しているとの懸念が示されているように、バランスが取られていない。このため、指導と評価の一体化を図る中で、多面的・多角的な評価が必要とされ、様々な評価方法が開発されてきた。その中でも、従来のテスト法では可視化されづらい知識構成の過程や高次のパフォーマンスを評価するための一つの方法として、ルーブリックが注目を集めている。ルーブリックとは、「成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を記した記述語からなる評価基準表」であり、「思考力、判断力、表現力等」を育むために適していると報告されている。しかし、ルーブリックを初等中等教育で効果的に活用するためには、次のような三つの問題があると考えられる。

第一の問題は、ルーブリックを何のために活用するかという点である。評価の目的の設定によっては、生徒の学びを阻害してしまう可能性があるということである。授業者が等級評価（評定）と評価（アセスメント）を意識的に区別する必要があるが、実態は明らかになっていない。第二の問題は通常の授業において、複数教員で共通のルーブリックを活用することが実際に可能かという点である。ルーブリックを作成する時には、その信頼性を高めるために複数の評価者間でのキャリブレーションやモデレーション等が推奨されているが、実際に複数教員で活用することは可能なのだろうか。第三の問題は、継続してルーブリックを活用することで浮かび上がってくる学習評価そのものに対する課題でもある教員の苦労や負担感である。このように、授業者が実際にルーブリックを活用し、生徒の学びを多面的・多角的に評価することは容易ではない。

本研究では、継続してルーブリックのもつアセスメント機能を活用するためには、授業者のニーズに合った信頼性のあるルーブリックをどのように作成することが望ましいのか。また、授業設計をする上で、どのようにルーブリックを位置付ける必要があるのかを明らかにすることを目的とした。

2 研究の内容・研究の方法

ルーブリック活用に関する問題は、授業一時間もしくは数時間に、教室のみで起こっている訳ではないため、ルーブリックに関する一連の作業を実際に行っている現職の教員を対象にアンケート調査とインタビュー調査を実施した。これらの調査は、教科担任制である中学校及び高等学校で理科を担当する教員対象に実施した。理科は、その活動的な学習の多さゆえに、『その活動のねらいは何か？』『科学的な思考力・表現力を伸ばすのに、その活動は有効なのか』という視点で、『活動（アクティビティ）』を検討することが大切である」と警鐘が鳴らされている。このことから他の教科以上に、評価方法の検討が必要であると考え、調査の対象とした。

(1) ウェブアンケートによる学習評価方法の現状把握

①学習評価方法に関するウェブアンケートの作成

ウェブアンケートの項目を表1のように設定した。アンケートの内容は、現行の学習指導要領で重要視され、教員にとっても評価が難しいとされる「思考力・判断力・表現力」に関する評価を中心に問いを作成した。

②学習評価方法に関するウェブアンケートの実施

ウェブアンケートは2016年6月中旬から8月中旬まで2ヶ月間公開した。15都道府県74名の理科教員から回答が得られた。

(2) インタビュー調査による現状把握

2016年8月中旬から9月にかけて半構造化インタビューを1時間程度ずつ実施した。インタビュー対象者は、アンケート調査の結果からルーブリックを活用している教員を校種別に抽出し、その中から複数教員間でルーブリックを共有している教員と、

単独で活用している教員に依頼し、表2に示すような7名に協力いただいた。

表1 ウェブアンケート調査による評価方法の現状把握

A、フェイスシート
・所属、担当教科、指導年数
B、「思考力・判断力・表現力」を評価する方法について
・どのような評価を実施しているか。(選択肢)
・どのような頻度で実施しているか。(選択肢)
・それぞれの評価に対して、ルーブリックを活用しているか。(選択肢)
・評価基準・規準を検討するときに、何を参考しているか。(記述)
C、複数教員でのルーブリック活用
・複数教員での活用有無、その理由。(選択・記述)
・複数教員での活用に関わるメリット・デメリット、デメリットを乗り越えるための工夫。(記述)
D、連絡先

表2 インタビュー対象者

教諭	所属校	
A	公立H中学校	7年
B	公立I中学校	3年
C	公立I中学校	20年
D	公立J高校	6年
E	公立J高校	6年
F	国立K高校	30年
G	国立K高校	1年

3 研究の結果

(1) ルーブリックの活用の目的

【ウェブアンケート調査】ルーブリックを活用している教員は、回答者74名中61名だった。生徒の相互評価に活用すると答えた教員は、教員による生徒の評価、生徒による自己評価よりも少なかった。

【インタビュー調査】総括的アセスメントに相当する「評定・成績付け」、「説明責任」に関する内容と、形成的アセスメントに相当する「生徒の学習意欲喚起」、「授業の改善」に関する内容が得られた。

(2) 複数教員でのルーブリックの活用

【ウェブアンケート調査】複数教員でルーブリックを活用していると回答した教員は、中学校担当者では7名、高等学校担当者では14名であった。複数教員で活用する理由と活用しない理由について複数の回答が得られた。

【インタビュー調査】複数教員での活用について、複数教員でルーブリックを共有する際の学習内容に関する語りと、教員間の関わりについて「教科指導の指針」、「若手支援」に関する語り得られた。

(3) ルーブリックの活用による負担感・多忙感

【ウェブアンケート調査】「思考力・判断力・表現力」を評価するために、「客観テストや課題」の実施が多く、「エッセイ・小論文・論説文」と「ロールプレイング・演劇・ダンスによる表現」の実施は、他の課題と比較して実施が少なかった。

【インタビュー調査】時間不足や負担感について語られた。また、ルーブリックを使って評価している実験について、教科書の記述内容について語られた。

4 研究の考察

中学校・高等学校理科において、ルーブリックのアセスメント機能を授業設計に活かすために必要な要素として次の四点を提案する。

(1) なぜ、その評価を行うのか、目的を明確にする。総括的アセスメントとして実施するのか、形成的アセスメントとして実施するのかについて授業者が意識することで、ルーブリックの役割は変化する。特に総括的アセスメントとして活用するときは、モチベーションの低下など、生徒に与える影響を十分に配慮する必要がある。ルーブリックはツールである以上、ルーブリックの活用自体が目的となることがないようにする。

(2) どのような形態でその評価を行うのかを検討する。その評価の目的に応じて、教員による生徒の「学習の評価」だけでなく、生徒が相互に評価や生徒自身で自己評価する「学習のための評価」活動も候補に入れる。それぞれの特徴を活かして導入のタイミングや頻度を検討することでより生徒の学習を促すのではないかと考える。

(3) 何を評価するのか、生徒の学習活動を検討する。評価の目的と形態を考慮した上で、その学習活動を評価する価値があるのか否かを吟味する必要があると考える。指導と同じく、評価も「網羅」することが、生徒の学びを促すとは限らないため、熱心であればある程、注意が必要である。

(4) 作成したルーブリックが対象の生徒にとって適切か、また(1)から(3)の要素が適切に設定されているか、他者の視点から確認する。自分もつ前提認識に一人で気づくことは難しいため、他者の力を借りることが重要であると考え。また、他者の視点を得るための対話を通して、ルーブリックの信頼性を担保するとともに、OJTの促進や授業設計のブラッシュアップも期待できる。

5 今後の展望

これら四つの要素は、教員対象の調査から教員の視点で浮かび上がらせたものであり、この要素を考慮した授業設計を行った場合に学習者である生徒にどのような影響を及ぼすかは、本研究では明らかになっていない。学習者である生徒の視点で、ルーブリックのアセスメント機能を活かすための検討が今後の課題である。また、40人規模の普通学級で多様な評価を実施するために、ICT機器の活用方法も検討していきたい。また、本研究で得られた知見は、自らの授業実践で活かすだけでなく、教員対象の研修会等で共有し、ブラッシュアップすることにより、生徒の学習をより促す評価の実施を目指したい。

